

情報共有

(非管理メモ)

A/ISA班
← 宮 東務班

(2枚)

東京電力株式会社

8/19, 14:20

取扱注意 公開不可

公報班

プラント状況(本店レク) 議事メモ

日時：平成23年8月19日(金) 11:00~11:20

場所：東京電力本館3階大会議室

先方：記者約20名(カメラ3台)

当方：原子力・立地本部

原子力設備管理部

広報部

配布資料：

- ・ 福島第一原子力発電所 プラント関連パラメータ(8月19日6:00現在)

よりプラント状況、配付資料に関して説明。

質疑：

Q. 本日福島では雨が降っているようだが、SFPのサンプリングは予定通り行うのか。

A. 屋内での作業であるため、天候に関係なく行う。本日は1~3号機をサンプリングする予定。

Q. 雨による水位影響についてはどうか。

A. 雨水の流入は予想されるが、水処理施設は稼働していることから、タービン建屋の溜まり水は継続してプロセス主建屋へ移送する。また水曜日にもお知らせしたが、水処理設備の稼働状況については、今週から降雨状況を考慮したシミュレーションも行っている。なお、平均降水量の場合、O.P.3mに到達するのは1~2週間ほど遅れるとみている。

Q. SARRYの単独運転については準備が整い次第とのことだが、具体的にいつ頃なのか。

A. 処理した水のサンプリングの結果が整い次第になるが、早ければ本日午後にも実施できるのではないかと。また、SARRYの並列運転を見据え、SPT(B)から淡水化装置への移送量を50m³/hから70m³/hまで上げるため、本日9時よりRO淡水化処理装置を停止しホース交換作業を行っている。Q. SARRYを並列運転すると処理能力が70m³/hまで上がるということか。

A. 淡水化装置はSPT(B)の水位を見ながら間欠運転をしている。キュリオン、アレバの組み合わせとSARRYの並列運転でどの程度処理能力が上昇するかについては今後の運用次第である。

Q. 炉注量を減少させた3号機原子炉のパラメータに上昇は見られないのか。

A. パラメータを見る限り大きな変動はなく、1m³減による影響はほぼ無いのではないかと見ている。引き続き24時間ほど様子を見る予定。

Q. SARRY を並列運転し処理量を上げていく際、単純計算で油分離装置に 100 m³/h 以上流れることになると思うが、対応できるのか。

A. SARRY が単独運転する場合は、雑固体廃棄物減容処理建屋から吸い上げて運転するため、キュリオン側先頭のプロセス主建屋に設置されている油分離装置は通さずに処理することになる。

Q. SARRY は油分離装置が無くても処理できるということか。

A. SARRY の先頭に油除去フィルターも設置されているが、処理量が増えてくると油分は別途除去すべきと考えており、油分離装置を追加設置することを考えている。

Q. SARRY の設計上の最大処理能力は。

A. 50m³/h である。なお日量では 1200m³/日。

Q. SARRY の先頭にある油除去フィルターの中にはゼオライトが入っているとのことだが、これはキュリオンと同様、表面加工されたゼオライトが入っているのか。

A. ゼオライトの詳細についてはメーカーノウハウのため申し上げられないが、ゴミを除去するような加工がされているもの。

Q. 原子炉注水量を段階的に上げて冷温停止に向けて将来的に原子炉注水を段階的に上げていく予定とのことだが、具体的にどの程度まで流量を増やすのか。

A. 1号機で実施したように、流量を上げた際の温度の変化度合いを見ていく必要がある。その結果を参考に、どの程度の流量を設定するかを判断していくことになるのではないかと。

Q. 3号機に炉注水の流量調整弁を設置したが、今後、少ない流量で最大限の効果を得るための検討は行っていないのか。

A. 3号機を除き現時点でこれ以上流量を下げることは検討していない。1, 2号機では自然に流量が下がることがあったのでそちらを注視してまいりたい。この状態をキープしつつ、タービン建屋の水位を下げてまいりたい。

以上

取扱注意
公開不可

8/20 10:25

広報班

NISA 5位

官内連絡班

情報部 共有

神谷 様

5納

プラント状況 (本店レク) 議事メモ

日時：平成 23 年 8 月 19 日 (金) 18:00~18:50

場所：東京電力本館 3 階大会議室

先方：記者約 25 名 (カメラ 3 台)

当方：原子力・立地本部

原子力設備管理部

原子力運営管理部

広報部

配布資料：

- ・ 福島第一原子力発電所の状況
- ・ 福島第一原子力発電所敷地内における空気中の放射性物質の核種分析の結果について (第百四十七報)
- ・ 福島第一原子力発電所付近における海水中の放射性物質の核種分析の結果について (第百四十九報)
- ・ 福島第一原子力発電所取水口付近で採取した海水中に含まれる放射性物質の核種分析の結果について (8月18日採取分)
- ・ 茨城県沖における海水中の放射性物質の核種分析の結果について (続報 23)
- ・ 集中廃棄物処理施設周辺 サブドレン水核種分析結果 (8月19日)
- ・ 滞留水処理分析結果シート
- ・ 福島第一原子力発電所 プラント関連パラメータ (8月19日 12:00 現在)

よりプラント状況、配付資料に関して説明。

質疑：

- Q. サリーについてはホースのつなぎ換え作業は終了しているのか。また、サリーの除染性能については、10 の 6 乗レベルの高濃度汚染水を処理することが可能と考えてよいのか。
- A. ホースの設置工事については明日まで行う予定。そのため、RO膜による淡水化装置が停止する関係でろ過水からの補給を実施している。補給量は約 190m³を予定している。サリーの性能については、10 の 6 乗レベルの水を入れて評価している訳ではなく、サリーの入口から 10 の 3 乗レベルの汚染水を通水し、NDまで低減していることを確認している。今後、10 の 6 乗レベルの汚染水を入口から通水し、出口での線量がどの程度になるかを確認する予定。なお、サリーの単独運転については明日の会見にて実績をご報告させて頂きたい。

- Q. 昨日の会見の中で、汚染水処理費用については非公開にするとのことだったが、5月時点では 531 億円との見積もりを公表していたと思う。そこからどの程度増加し

たかを教えてほしい。

A. 水処理にかかる費用として、1 L処理するにあたり 210 円かかると想定し 531 億円かかると公表させて頂いた。その後の増加した費用については、個別の契約事項に係わるため公表は控えさせて頂きたい。なお、第一四半期決算において、道筋により抑制にかかる費用として 1,531 億円を計上しているが、これは水処理装置にかかる費用も含んでいる。

Q. サリーの単独運転は、ホースの交換作業終了後の明日から開始ということか。

A. ホースの交換作業については、SPTからRO膜の淡水化装置に行くまでのラインにおける作業であり、サリーの運転とは関係ない。SPTに受け入れ可能な範囲であれば並行運転は可能であり、準備が整い次第、サリーの運転を開始する予定。

Q. サリーが単独運転を開始すると、水処理装置の処理能力はどうなるのか。

A. 現在、キュリオン・アレバについては $45\text{m}^3/\text{h}$ の処理量にて運転中であり、サリーについては定格流量処理する場合は $50\text{m}^3/\text{h}$ となる。

Q. 水処理装置全体の処理量としては $45\text{m}^3/\text{h}$ と $50\text{m}^3/\text{h}$ を合計してよいのか。

A. その通り。但し、SPTの受け入れ容量により処理そのものが停止することはある。

Q. RO膜の淡水化装置の処理量としては、 $70\text{m}^3/\text{h}$ が上限という理解でよいのか。

A. 水処理設備が稼働することでSPTに連続的に処理水を受け入れる事になると、RO膜の淡水化装置への供給量が $70\text{m}^3/\text{h}$ で上限となる。

Q. キュリオンとアレバの装置では初期トラブルが発生していたが、サリーについてはどのように評価しているのか。

A. まだ稼働を開始して2, 3日であり、初期レベルを抜け出したかどうかについては慎重に判断したい。今後運転することで初めて判明することもあると思う。

Q. サリーの単独運転を開始した場合、合計で $95\text{m}^3/\text{h}$ の処理能力が出ることだが、その処理水をSPTに受け入れ、RO膜の淡水化装置へは $70\text{m}^3/\text{h}$ で供給していく、という理解でよいのか。

A. 淡水化装置についてはSPTの水位を見ながら間欠運転を行っている。 $95\text{m}^3/\text{h}$ でSPTに入ったとしても、SPT等のタンクが満水であり、RO膜の淡水化装置が運転できない状況であれば、水処理装置としては中断することになる。

Q. 当初、サリーについてはキュリオン、アレバのバックアップ設備として考えていたと思うが、キュリオンとアレバが停止した場合の対応はどのように考えているのか。

A. これまで様々な運転パターンについて確認を実施している。例えば、アレバ除染装置の停止期間が長引くことがあれば、キュリオンとサリーによる運転が可能であり、また、現在キュリオンのH3スキッドのポンプについては今後修理が必要だが、その際にキュリオンセシウム吸着装置を停止する場合については、アレバとサリーでの運転も可能である。今後、100%以上の稼働率を目指すことも可能であり、キュリオンおよびアレバの装置において不具合が発生したとしても、大幅な稼働率の低下はないと

考えている。

Q. 不具合が発生した場合については、装置の組合せを変えて運転することが可能ということか。

A. その通り。

Q. WEBカメラの増設、また、計器類の確認用カメラの映像公開の検討はどうなっているのか。

A. 技術的には可能だが、設備の増強やサーバーの問題があり難しい。また、インターネットの公開は、視聴者には様々な考えを持った方がおられると考えており核防護の観点からも難しいと考えている。

Q. 難しいとのことだが、社外のメディア会社にも相談しているのか。

A. 私契約に関する事であり回答を差し控えさせていただく。

Q. サーバーの増強等は難しくないと思う。また、公開すると誰が見るかわからないことから問題があるとのことだが、理解ができない。

A. 何十箇所もある計器類を公開することでサーバー上の負荷の問題があるのではないかと考えている。また、核物質防護上、屋外の建屋の映像を公開することは難しいと考えている。

Q. 高レベルの滞留水が現状どのくらいあるのか。

A. 17日の週報時点での最新値で、建屋側が94,920m³、集中廃棄物処理建屋の汚染水が23,810m³。なお、サイトバンカの10の4乗レベルの溜まり水は含まれていない。

Q. 2号機の注水量を3.5m³/hから3.8m³/hに調整したとのことだが、また、午前の会見でも1・2号機は自然に注水量が低下するとのことだが、その理由は何か。

A. 2号機は少しずつ流量低下傾向がみえたことから本日15時30分に3.5m³/hから3.8m³/hの調整を行っている。1号機、2号機については、これまで流量が自然に下がるという傾向がみられている。原因としては、バルブを全開寸前で調整していることから吸い込み側の圧力の影響や、温度の影響などを受けているのではないかと考えている。引き続き流量についてはよく監視して参りたい。

Q. 常にバルブの操作をしているのか。

A. 2～3日に1回の頻度で行っている。

Q. 炉注水が、別のところに流れているわけではないのか。

A. そういうわけではない。

Q. ホウ素は現在も原子炉や使用済燃料プールに入れているのか。

A. 原子炉、使用済燃料プールともに現状ホウ素は入っていない。将来的には、原子炉に関しては当面ないが、使用済燃料プールにおいては今日明日で水質調査を行い、pHがアルカリ性であった場合は注入する可能性はある。

Q. 海水浄化装置の効果はどのようにみているのか。

A. 効果についてははっきり見えていない。100日間かけて10万トン程度入れ替えるが、防波堤の中だけでも海水が30万トン程度あることから、はっきりとした効果が見えてこない。

Q. これまで交換してきたゼオライトからどのように評価しているのか。

A. 確認する。

Q. 捲き上がりなどをみると、海底土に相当量のセシウムがあるように思うが、今後除線は行わないのか。

A. 防波堤内側の海底土については特に予定はない。しかし、物揚場の前では海底土をサンプリングして経過観察をしている。

Q. 海底土の除染の計画や、技術はあるのか。

A. 海底土を浚渫するなどについてはまだ検討してない。

Q. 鋼管矢板を打つことによって巻き上がりがある中、遮水壁を打つことによって放射性物質の巻き上がりが相当起こるのではないのか。

A. 防波堤の止水板が津波で壊れたところを鋼管矢板で塞ぐことで、南側への流出を防ぐ予定。これにより、遮水壁を打った際の巻き上がりが外洋にでるリスクは小さいと考えている。

Q. 防波堤の先は開いているが、塞ぐ考えはあるのか。

A. 今後、資材の運搬等もあることから、港は港で生かしたいと考えている。

Q. キュリオン・アレバの流量が45m³/hとのことだがその理由は。

A. キュリオンが4分の3系列で動いていることから若干流量が落ちているもの。

Q. 平行運転時のトータル流量は100m³/hという理解でよいか。

A. 現状は95m³/hであり、将来的には100m³/hとなる可能性はある。

Q. 炉心溶融した核燃料の取り出しについて、日本原子力研究開発機構が核物質の種類や量を測定する技術開発に着手するとのことだが、東京電力も承知しているのか。

A. 今朝の新聞報道で知った次第であり、必要であれば当社も協力させていただきたい。今後の取り組みについては、原子力委員会において部会が立ち上げられたことから、こちらでロードマップが作成されると考えている。そのロードマップに対し必要な情報は提供していると思うが、東京電力として同部会にコミットしていることはない。

Q. 東京電力独自で核物質の種類や量を測定する技術開発に取り組むことはあるのか。

A. 現在、事故の収束に向けて、冷温停止・放射性物質の拡散抑制に向けて取り組んでいるところであり、燃料取り出しはその後と認識。

6

Q. ふくいちライブカメラはどれくらいの方が見ているのか。

A. 確認する。

Q. 海江田大臣が線量計を置いて作業をした件につき美談として話していたが、その事実関係はどうか。

A. 当社、協力企業に対してアンケート調査を実施しているところ。1ヶ月程度で調査を行っており、8月下旬、9月上旬あたりには取り纏まると考えている。

以上